

曲亭馬琴『敵討枕石夜話』考

中尾和昇

はじめに

文化五年（一八〇八）は、馬琴読本の出版点数がピークを迎え、なおかつ『三七全伝南柯夢』や『椿説弓張月』後編といった傑作（注1）が出版されるなど、馬琴読本が大きく成長を遂げた時期である。そのような中、上総屋忠助を版元とした馬琴の中本型読本『敵討枕石夜話』（注2）（以下『枕石夜話』と略記）が出版された。『枕石夜話』は、書名に「敵討」とあるように、獵師戸五郎が枕石寺の僧円石を殺して路銀を奪う場面を発端とし、最終的に円石の息子要太郎が、敵である戸五郎を討つという敵討物語である。従来の研究では、横山邦治氏が、敵討としての発端と結末を「付けたり」として、敵討構造の不完全性を指摘し、高木元氏が、浅草に関するさまざまな趣向を重ね合わせることは「草双紙的」であると述べているなど、馬琴読本の中でも、あまり高い評価がなされていない。しかし、本作品を精細に読み

解いていくと、さまざまな趣向を取り入れながらも、物語は因果応報を軸として展開し、全体の敵討構造との調和が保たれていることがわかる。これは本格的な半紙本読本に類する特徴を示していると考えられるのではないか。

そこで本論文では、中心となる「牛鬼伝説」「一ツ家譚」の典拠を指摘し、因果応報を軸とした敵討構造を考察する。

(一)

まず考察に入る前に、『枕石夜話』の梗概を示しておく。

上総国海上郡浪の山に住む獵師戸五郎は、誤って枕石寺の僧円石を殺して路銀を奪う。その路銀を元手に、浅草に移って回船業を営むようになった戸五郎は、海で牛の角を手に入れる。老翁に海に捨てるようにすすめられるが、それを聞き入れない。そのため、浅草寺で妻綾瀬は牛鬼に殺さ

れ、さらに娘の浅茅は牛鬼の涎を浴びせられて妊娠してしまふ。浅茅は五年の後無事女子を出産して駒形と名づけるが、それより浅茅の心は貪婪になる。ある日、浅茅は、寒暑を快適に過ごせるという石の枕を拾おうとしたところ、戸五郎の甥、鴨八と出会って夫婦となり、それ以後は旅人を殺して路銀を奪うことを生業とする。後日、同じような手口で旅の僧を殺したが、死んだのは娘駒形であった。しかし、霊薬によつて駒形は蘇生する。これに懲りた二人は一つ家で旅籠屋を営むようになる。ある日、浅茅は病気に罹り、以前の霊薬を飲んで回復するが、白髪の姥になつてしまふ。鴨八が台所で寝ていると、漬物石が頭に落ちて死んでしまふ。浅茅はこれより思いつき、寝ている旅人の頭に石を落として殺し、路銀を奪う。ある日、浅草寺の稚児が一つ家に泊まり、母の罪業を贖おうと思つた駒形は、この美少年の身代わりとなつて浅茅に殺される。実はこの美少年は浅草観音の仮に姿を現わしたもので、順礼の男にのりうつつていたのである。怒つた浅茅は大蛇となつて順礼の男を追いかけて殺そうとするが、男は観世音の御影を大蛇の前にさし向けると、大蛇は浅茅の死骸となり、空中に光るものがあつて、その光は牛が鳴くようにして散乱し、白

蓮花となつて西へ飛び去る。様子を伺つていた戸五郎が出て来て慙愧後悔するが、順礼の男が自分は殺された僧円石の息子要太郎であると述べ、戸五郎の首をかき落として父の靈魂を祀り、故郷へ帰る。

では、はじめに物語の発端から戸五郎の娘浅茅が懐胎・出産するまでの部分について、「牛鬼伝説」の典拠を中心に考えたい。

(1) 牛鬼に襲われる

戸五郎は、円石を殺して路銀を奪い、死骸を海に流した後、浅草に移つて回船業を営む。ある日、海中より牛の角のようなものを得、老翁に「海で溺死した人の怨霊は牛鬼という獣に化し、その牛鬼を見るとたちまち死んでしまうので、その角は海へ戻すべきだ」と諫められるが、聞き入れない。しかし、その老翁の予言は的中し、浅草寺において妻綾瀬が、円石の怨霊である牛鬼に突き殺され、娘浅茅は毒気を吹きかけられてしまふ。左が浅草寺の場面である。

時に建長三年三月六日、戸五郎が妻綾瀬は、金龍山の花を見んとて、今茲十二才になりける、女兒浅茅を拜て、浅草寺に詣、まづ観世音を拜して、やがて本堂の後なる、食堂のほとりまで到る折しもあれ、俄頃にはかに海鳴り風吹おろし、

その容牛のごときもの忽然として走り来つ。直に角をもて綾瀬が胸さかをつらぬき、これを項にふり被つ、浅茅に毒氣を數回吹かけ、只一跳に食堂に突て入るに、こゝに集る法師ばら、驚き怕れて昏絶し、矢庭に死するもの七人、病痾を受けて、久しく起ざるもの、廿四人に及べり。

〔枕石夜話〕上

馬琴はこの後に「按ずるに、東鑑建長三年三月六日の記に云、この日牛の如きもの浅艸寺に走り入る。時に食堂に聚る所の寺僧五十口、件の怪異を見て、廿四人立所に病を受、七人即座に死と云々」と述べ、この部分が『吾妻鏡』に拠つてゐることを仄めかしてゐる。確かに『吾妻鏡』建長三年の項には、「六日丙寅。武藏国浅草寺。如^レ牛者忽然出現。奔^二、走于寺。于^レ時寺僧五十口計、食堂之間集会也。見^レ件之怪異、廿四人立所受^レ病痾起居進退不^レ成。居風云云。七人即座死云云」(『吾妻鏡』第四十一「建長三年三月」とあり、馬琴が典拠の一つとしてゐることは明らかだが、牛鬼が毒氣を吹きかけたという記述は『吾妻鏡』に見られない。では、馬琴はこの記述をどのような書物から見出したのか。

牛鬼の「毒氣」は、「涎沫」と後述されているので、浅茅は牛鬼の「涎沫」を吹きかけられたということになる。右のような、

牛鬼が「涎沫」を吹きかけたという記述は、『古郷婦の江戸咄』(以下「江戸咄」と略記)に見られる。これには、かつて牛鬼が人民を悩ましたが、今はその牛鬼を一社の神として祀つてゐるという内容が述べられ、その後「もろ人のもうでくるまの牛御前よだれをながし守りたまはん」(『江戸咄』巻五、第十一「牛御前」という歌が記されている。また、『燕石雜志』(文化八年刊)巻三「地名の訛謬」において馬琴は、「この辺なる牛の御前の神社を、一郷の鎮守とする」と述べてゐる。さらに、牛鬼が涎を流したという記述は、他書に見られないので、馬琴は『江戸咄』を典拠にしたと考えられる。

また、同じ牛御前の物語として、『丑御前の本地』(元禄正徳頃)がある。『丑御前の本地』は、源頼光の弟である丑御前を主人公とした古浄瑠璃で、鬼神のような容姿である丑御前が一族からうとまれ、戦を起すが、最後は家臣ともども討たれるという話である。その最後の戦いにおいて、丑御前が「十丈のうしと成、てきにむかい、水をふかせ給」(『丑御前の本地』「六たんめ」と記されていることに注目したい。直接的な類似というわけではないが、巨大な牛が人を襲うという構図や、口から吹きかけるという意味において、両者はかなり近いものと考えられる。そして何より「丑御前」という主人公の名前がそ

れを裏付けている。

牛鬼の毒気は、言わば円石の怨念であり、それが浅茅に憑依したことによって、今後さまざまな禍が生じることになる。そのため、牛鬼襲撃の場面において、『吾妻鏡』には見られない記述が、『江戸咄』『丑御前の本地』を典拠として本作に摂取されているのである。

(2) 浅茅の妊娠と出産

牛鬼の「涎沫」が喉に入ったことにより、浅茅は妊娠してしまい、五年にわたる妊娠の後に女兒駒形を出産する。長い妊娠期間での出産ということ、「いかなる鬼子を産べきか」(『枕石夜話』下)と心配されたが、生まれた子は「玉のことく、忽ち地大きやかになりて、一月が程によく歩行、よくものいひて、尋常四五才のわらははくゝよのつねのおにこのみような賢女であった。ところが、それに反して浅茅は、駒形を産んでからというもの、「心さまたけ猛くなりて、膂力ちからは丈夫ますむをを三人も四人もあはせたらんがごとくにて、…人の誹謗そしりをかへり見ず、道理に叛きても、只おのれを利せん」(同)と、容貌や性格は一変する。

ここで注目したいのは、長期間の妊娠による出産と、出産後の性格の変化である。五年という異常なまでの長期間の妊娠は、

先述したように「鬼子」、すなわち鬼のような子が生まれてくるのではという不安を与える。鬼のような子とは、文字通り容姿が鬼のようで、性格も荒々しい子と考えられる。そこで想像されるのが『丑御前の本地』に見られる丑御前である。

らくわうの御しやてい、うし御前と申奉るは、その出生のはしめは、御母むちうに、北の、天神、たひなひに、やどらせ給ふと、御らんして、くわひたひ有事、三年三月、天慶四年のかとの丑、三月二十五日丑の日、丑の刻にたん生ある。さるによつて御名を、丑御前と申ける。三年あまりて出生の上、そうのきばは、はゑそろひ、かみは四方にくろくして、両かん、朝日のか、やくことくにて、ひとへに鬼神の御かたち、是た、人におわ□〔すか〕まし。…力のかきりは、いさしらす…事に心もふてき也。我かま、一に、くらさる、。(『丑御前の本地』「初段」)

右に挙げたように、長期間の妊娠を経た出産という点や容姿や性格の面において、類似が見られる。ただ、『丑御前の本地』で、生まれた子が鬼のようであるのに対し、『枕石夜話』では、産んだ浅茅が鬼のようになるので、両作品では逆転している。牛御前に関しては、先ほど述べたように、『江戸咄』にも見られるが、これだけでは牛の形をした化物というイメージしか生

まれない。そこで馬琴は、より人間的な牛御前像を浅茅に織り込ませるため、この『丑御前の本地』を典拠として利用したのである。

さてここまで、牛鬼伝説の典拠を中心に述べてきた。円石の怨霊が牛鬼となり、その牛鬼が吹きかけた「涎沫」によって浅茅は妊娠・出産し、強欲な性格へと変化した。では、この牛鬼伝説を描くことの意味は何なのだろうか。それには三つのことが考えられる。一つは、戸五郎に殺された円石の怨霊を牛鬼という目に見える形で示し、円石殺害からの展開を円滑にしたことである。もう一つは、次章の「一ツ家譚」との関わりである。「一ツ家譚」は旅籠屋を営む姥が旅人を殺して路銀を奪うという物語であるので、一ツ家の姥となる浅茅を強欲な性格にさせる必要がある。そこで馬琴は、浅茅が円石の怨念の化身である牛鬼に「毒気」を浴びせられるという設定にしたわけである。三つ目は、敵役の交代である。浅茅の妊娠を知った戸五郎は、自らの悪事が引き起こした惨状を知り、姿を消す。物語の流れからすれば唐突な印象を与えるが、これまで敵役を担っていた戸五郎が姿を消すことで、その役割が浅茅へと移ったのである。戸五郎は物語の最後まで姿を見せることはなく、その間浅茅の悪事が全面的に押し出されることになる。この三点から考えると、

牛鬼伝説を媒介とした、物語の発端から一ツ家譚までの連続性が認められるのではないか。

(二)

次に、『枕石夜話』後半の「一ツ家譚」について考察を進める。先に述べたように、浅茅は娘駒形を産んだことよって性格が一変する。だが、一般的な一ツ家譚に見られるような、寝ている旅人の頭に石を落して殺害し、路銀を奪い取るという話に直接移行するわけではない。性格は変化しただが、「一ツ家の姥」になりきれいでないのである。そこで馬琴は、浅茅を「一ツ家の姥」にするために二つの段階を設けた。これは章題にも「圓通菩薩一たび(二たび)朝茅を懲らす」とあることからわかる。

①寒暑を快適に過ごせるといふ石の枕を拾おうとしたころ、戸五郎の甥鴨八と出会って夫婦となり、以後は道端で旅人を殺害して路銀を奪い取ることを生業とする。誤って娘駒形を殺してしまうが、霊薬によって蘇生する。これを悔いた鴨八夫婦は、旅籠屋を営む。

②浅茅は病気にかかり、以前の霊薬を飲んで回復するが、白髪が死んでしまうことから、浅茅は宿に泊まる旅人を漬物石

を落して殺害し、路銀を奪い取ることを思いつく。

右に示したように、この二段階を経ることで、浅茅は容姿も性格も「一ツ家の姥」たるにふさわしい存在となった。これらの多くについて、典拠を見出せていないが、例えば①の「石の枕」について言えば、『枕石夜話』冒頭での枕石寺の縁起が『和漢三才圖会』（正徳二年（一七一二）序、同五年（一七一五）跋）巻六十六「枕石村」の項や、『親鸞聖人御旧跡二十四輩記』（享保十五年（一七三〇）刊）巻五「常陸国久慈郡上河合村龍上山大門院枕石寺」の項などに拠っていることがわかった。その他については、今後の課題としたいところである。

さて、では改めて一ツ家譚の典拠を考えたい。まずは序文における馬琴の記述から解きほぐしてみよう。馬琴は序文の冒頭で、「宗祇法師が回国記に」と明記しているように、『廻国雑記』（文明十九年成立）をほぼそのまま引用している。ところが、序文の後半では、「又一説に」と曖昧な表現に止めており、前半と比べれば、明らかに事情が異なっている。管見の結果、序文の後半は『江戸砂子』巻四「明王院」に拠っていることがわかった。細かい部分の違いこそあれ、先に『廻国雑記』を引用したのと同様に、『江戸砂子』をほぼ丸ごと引用していることがわかった。このように、序文を書く姿勢が前半と後半で異なるのは、作

者馬琴の意図が反映されているからであろう。先ほど牛鬼伝説のところでも、馬琴は『吾妻鏡』を利用したことを仄めかしながらも、実際には『江戸咄』の方を積極的に利用していることがわかった。実際馬琴の諸作品では、本文中に明示された典拠が中心をなしていないことがあり、執筆の際に典拠として利用した作品だということを、読者に察知されることを避けたのである。ただ、序文で『江戸砂子』を引用しているからといって、それをも本文の典拠として考えるのは難しい。そこで考えられるのが『江戸咄』である。『江戸咄』には、先ほどの牛御前と同じ巻五に、「明王院の姥ヶ池」という話があり、注7で示したように、『巷談坡隄庵』において「援引書籍目録」として示している中に、「江戸咄」が挙がっている。つまり、馬琴は『廻国雑記』や『江戸砂子』で記された一ツ家譚よりも、『江戸咄』に記された一ツ家譚を重視し、それを典拠にして、一ツ家譚を構成したのではないか。そこで、本文における一ツ家譚の場面を四場面に区切り、以下それぞれについて『江戸咄』と比較検討していく。

(1) 寝ている旅人の頭に石を落して殺す

浅茅は、夫鴨八の死をきっかけに、宿に泊まる旅人が寝てい

るところへ石を落して殺害し、路銀を奪い取る。この場面は、『江戸咄』の記述とほぼ同じである。

ひとり宿かる旅客（ちやくとく）の臥（ふしど）筆の上には、大なる石を釣おきて、石の枕をさし、甲夜（よひ）より燈火（ともしび）を置ず、その熟睡（うまひ）するを張（うか）ひて、釣たる石の索（なは）を切落して打殺し、天（よ）の明（あ）ざる間に、屍（しかばね）を川へ流せし…（『枕石夜話』下）

としおひたる姥の、若かりし娘を持って住けるが、往來の旅人に宿をかし、石の枕をあたへ、ふしける時上よりも大石をおとし、頭をうちくだきころして、衣裳を剝取、からだを此池にすてぬ。（『江戸咄』巻五、第七「明王院の姥ヶ池」）

(2) 稚児に化した観世音

「日はくれて野には臥とも宿かるな浅草寺の一ツ家の石」という歌が唄われ、一ツ家では旅人を宿に泊めては石で殺して路銀を奪うという風聞が広がり、宿を借りる者は少なくなつた。ある日の夕刻、浅草寺の稚児と称する美少年が「日はくれて…」という歌を笛で吹きながら現われ、一ツ家に一宿を乞う。この場面も『江戸咄』に見られるが、宿を借りるのは稚児ではなく旅人である。

いと臆（おそ）闖（いり）たる美少年、朝茅が門（かど）に立（た）て、腰なる笛を拔出し、音律（ねいりつ）妙（た）に吹すさむを聞ば、「日はくれて野に臥すとも云々」といふ童謡（わらうた）を、唄ふがごとく吹しかば、朝茅聞て大に怒り、箒（はら）かいとつて忙しく走り出、月光（つきあかり）にすら見れば、このわたりには見も馴ぬ少年なれば、ふた、び怪み、理不盡には追ひもやられず、…駒形（こまがた）に給待（きまつ）さして、夕餐（ゆふげ）をす、め、「とく睡り給へ」とて、用意（ようい）の臥房（ふしど）へ伴（とも）ひ…（『枕石夜話』下）

浅草の観世音草かりに御身を変じさせ給ひて、笛を吹せ給ふ。其笛の音をきけば、

日は暮て町にはふす共宿かるな浅草寺のひとつ屋の内
此笛の音をひとりの旅人聞て、ふしぎに思ひながらも、やどなきま、の宿として、爰にやどりしが、あるじのうば、旅人を一入もてなし、彼石の枕をあたへふさせける。

（『江戸咄』巻五）

(3) 駒形の身代わり死

駒形は、貪婪な母浅茅によつて、この稚児が殺されてしまうことを恐れ、寢室で寝ているところを訪れるが、先ほどの稚児

ではなく、巡礼の青年になっていた。その青年の話によれば、宿願があつて、百箇所の霊場を順礼し、この頃は、浅草寺の観音堂で七日間通夜したが、夢に童子が忽然と現われて、

汝われに従ひて来れ。明朝夙願を果さすべし。汝が今ゆくところにて、更闌ころ、呼び覚すものあり。そのとき起出で、如此々なる池の畔にありて、天の明るをまで。かならず宿願を果すことあらん。(『枕石夜話』下)

と、宿願を果たす時がやってきたことを説き示したという。つまり、浅草寺の稚児が、実は観世音の化身であり、青年の夢に現われ、順礼の青年の宿願を果たさせるために、一ツ家の宿に泊ませたのである。一方『江戸咄』では、「我は是此浅草の観音也。汝常にくわんおんを信ずる故に、かく告の笛を吹て、汝が命をすくひし也」(『江戸咄』巻五)とあり、旅の者が観世音を強く信仰していたことから、その化身が夢中に現れ、逆に姥に殺される前に一ツ家の宿から助け出した。

また、駒形が稚児を救う動機となつたのは、『枕石夜話』では、前述したように純粹に浅茅の強欲を防ぐためであるが、『江戸咄』では、「此児のゆうにやさしくたへなるすがたに心まどひて、彼ちこのふしける所へ、忍び入てそひぶし」(『江戸咄』巻五)たということになっている。

(4) 大蛇になつた浅茅

誤つて娘駒形を殺してしまつた浅茅は、怒り狂つて順礼の男を追いかけ、切りつけようとすると逆に肩先を切られて池に沈む。しばらくすると、朝茅は半身大蛇となつて水中より現われる。この場面も『江戸咄』に見られるが、娘を殺してしまつた悲しみに堪えきれずに、池に身を沈め、その怨念が大蛇となる。

かなさけなきうばなれども、おやおひしうのなげきふかく、かなしさたえがたくや有けん、此池へ身をなげうせしとかや。其しうしん大じやとなり、人を取ころす事おびたゞし。(『江戸咄』巻五)

このように、『枕石夜話』の一ツ家譚は、『江戸咄』を典拠として構成されていることがわかつた。特に(3)で、旅人の夢中に観世音が現われる場面は、前述した『江戸砂子』や『廻国雑記』には見られず、『江戸咄』にのみ見られる。馬琴は『江戸咄』からこの一節を見出し、単に観世音の霊夢によつて命を救われる「旅人」という抽象的な存在であつたのを、「順礼の青年」と具体的な人物設定をし、さらに悪事を重ねた浅茅を懲らしめるといふ役割をも賦与している。後述するが、実はこの青年こそが戸五郎に殺害された円石の息子要太郎である。この要太郎を触媒として、一ツ家譚と結末である敵討の場面は融合

し、物語の円滑な展開が可能になったと言える。言い換えれば、観世音の靈夢という場存在する『江戸咄』によつて結末部への移行が可能になったのである。

(三)

ここまで「牛鬼伝説」と「ツ家譚」の典拠を中心に考察してきた。では最後に、因果応報の観点から物語の展開と結末について、他の馬琴読本と比較しつつ検討を加え、その上で本作の敵討構造を考えたい。

読本全般において、因果応報は、物語を構築するにあつての大きな要素である。特に「超越者の予言」と「結末部における因果の開示」は、馬琴読本に見られる特徴ではないだろうか。そこで以下、この二点について検討する。

(1) 超越者の予言

先に述べたように、戸五郎が海で拾つた角に対して老翁は、およせ凡江海溺死の人、うちみ冤を含むときは、魂魄化して獸となる。これを鬼牛といふ。その形尋常の牛より大きくて、ちから臂力又水牛に百倍し、常に水中に沈淪して、人に見らるゝことなし。もしこれを見るときは、その人立地に死するといへり。

今彼を思ひ是を見るにこは全く鬼牛の角なるべし。はやく舊もとの海底に返さず、却て利を射んと計較給はゞ、遠らずして崇たかあらん。とかく海に投て、その舊もとに返し給へ。

(『枕石夜話』上)

と、牛鬼の禍を予言し、それを守らなかつたために戸五郎一家に不幸が起きたことに対して、

彼戸五郎は、故郷にて回国の行者を殺し、あまた夥の路銀を奪ひとりて、しがひ屍を海へ衝流し、ふきなが；囊に伊豆の海にて、あまた船底をつらぬきたる獸の角も、おきな老翁がいへるごとく、たふさ彼行者が冤魂、化して鬼牛となりて、むくは仇を執んとするに、たふさ；忽地これが為に、あやしきまひ女房綾瀬を殺され、あやしきまひ今又女兒浅茅、奇病を受けて、いんぐわてきめん因果觀面の道理を示す。(『枕石夜話』上)

と断じた。また、駒形が、稚児の身代わりとなつて死ぬことを決意した場面では、「母も邪見の角折れて、せきあくよわう積悪餘殃、いんぐわてきめん因果觀面のことわりを思ひしり、なかなら菩提の路に入り給ふ、なかなら媒ともなりぬべし」(『枕石夜話』下)と述べ、浅茅の積悪を歎じる。いずれも物語の途中で「因果」という言葉を用いて、それぞれの出来事が因果応報の理念に合致していることを強調している。

そもそもこの手法を確立したのは山東京伝であった。大高洋司氏は「『優曇華物語』と『月氷奇縁』—江戸読本形成期にお

ける京伝、馬琴―」（『読本研究』1、一九八七年四月）において、『優曇華物語』における了然尼や金鈴道人の予言と結果が果たす役割は「以後の江戸読本の主流に直結」し、さらに馬琴がその方法を『月氷奇縁』で再構成したと指摘する。さらに大高氏は、「『優曇華物語』と『曙草紙』の間―京伝と馬琴―」（『読本研究』2・上、一九八八年六月）において、文化二年出版の『稚枝鳩』においても『優曇華物語』からの少なからぬ影響を指摘する。つまり、馬琴はこの方法を京伝に学び、自身の作品にも活かしたわけである。

（2）結末部における因果の開示

結末部においては、順礼の青年が大蛇となつた浅茅に向かつて、

彼朝茅は、宿かる旅客（ひやくきやく）に、石の枕をさせ、石を落して、是を殺すの兇賊也。原はその父戸五郎が、浪の山にありしとき、常州枕石寺の頭陀（づつだ）を殺して、その路銀を奪ひとり、これをもて生涯を、安くせんとはかりしより、彼頭陀が怨霊（おんれい）、ながく祟をなし、化して牛鬼となりて、戸五郎が妻綾瀬を突殺し、又女兒朝茅が胎内にわけ入りて、五年が間（まひ）これを苦しめ、出生したる駒形は、孝順にして却て母に打殺され、今亦朝茅、

かく浅ましき姿となりて、衆人に見らるゝ事、みなこれ因果の道理を示すものなり。

と述べて、浅茅がこのような姿になつたことは、父戸五郎が円石を殺害したことに端を発しており、因果の道理に適つてゐることを説き示す。そして、観世音の御影を取り出し、浅茅に向けると、浅茅は死に果て、「空中に光物あつて、その声牛の鳴が如く、その光り散乱して、白蓮花と化し、西を投て飛去」（『枕石夜話』下）る。つまり、浅茅にとり憑いていた牛鬼、すなわち円石の怨念が観世音の冥助により昇天するわけである。その後、同じように観世音の冥助により戸五郎が現われ、順礼の青年は自分が円石の息子要太郎だと名乗り、見事に敵を討つ。

このような結末部で因果を開示する手法も、『勸善常世物語』（文化三年刊）や『墨田川梅柳新書』（文化四年刊）『雲妙間雨夜月』（文化五年刊）などに見られる。例えば『雲妙間雨夜月』では、左に示したように、すべての出来事は雨田武平が五色の鹿を殺したことに起因するとしている。^{（注10）}

雨田武平は五色の鹿を殺す

- ・ 武平は奇病で死ぬ
- ・ 雷（西啓）法師は妻呼ぶ鹿の声を聞いて墮落する
- ・ 武泰と武章は夫婦ともども横死する

以上のように、馬琴は京伝から学んだ手法をもとに、物語全体を因果応報でまとめ上げる方法を確立し、本作にも積極的に取り入れているのである。

また、『枕石夜話』は、敵討という枠組みの中に、『牛鬼伝説』や「ツ家譚」が趣向として包摂されている。この手法は、文化五年頃の馬琴読本に見られる大きな特徴である。例えば『括頭巾縮緬紙衣』(文化五年刊)や『三七全伝南柯夢』(同年刊)では、いずれも物語全体を後南朝の時代に設定し、展開部として、『括頭巾縮緬紙衣』では、『元日金年越』を、『三七全伝南柯夢』では、『艶姿女舞衣』や『女舞劍紅葉』などの浄瑠璃に見られる情話を取り入れ、結末に再び当初の時代に立ち戻る。しかも包摂された情話は見事に溶け込み、演劇的情趣を損なわず、且つ全体がバランスのとれた構造を保っている。これを『枕石夜話』に当てはめると、確かに横山氏の指摘するように、最後の敵討の部分は唐突な印象も受けるが、全体構造が破綻をきたすことはない。

『高尾船字文』(寛政八年刊)を執筆していた頃の馬琴は、読本作者としては未熟で、草双紙作者の域から脱しきれなかった。ところが、文化三、四年頃になると、因果応報の様式を確立し、『椿説弓張月』という長編作の執筆を開始するなど、

読本著述の方向性を見出していく。つまり馬琴は、半紙本読本を数多く執筆したことで培ってきた経験を、この『枕石夜話』で活用させたのである。

おわりに

以上、『枕石夜話』の敵討構造を考察してきた。「牛鬼伝説」「ツ家譚」という趣向が、『江戸咄』を主たる典拠として再構成され、それらが「超越者の予言」や「結末部における因果の開示」といった手法に代表される因果応報を軸として密接に絡み合い、物語発端部における円石殺害と結末部における敵討との間に見事に溶け込んでいる。これらの点から、『枕石夜話』は明確な敵討構造を持つていることがわかった。さらにこの構造を、『雲妙問雨夜月』『三七全伝南柯夢』など、文化五年頃の半紙本読本と比較した場合、類似する点が見られることもわかった。つまり『枕石夜話』は、中本型読本でありながら、読本としての完成度は本格的な半紙本読本に近いと言えるのである。

(注)

1. 馬琴は『近世物之本江戸作者部類』(天保五年)で、『三七全伝南柯夢』『椿説弓張月』『南総里見八犬伝』を「三大奇

書」と称している。

2. 国立国会図書館蔵本(208・163)を底本とする。

3. 横山邦治『読本の研究・江戸と上方と』(風間書房、一九七四年四月)

仇討ち話の中心的要素となる孝子(もしくは貞婦・忠僕など)の苦勞話は全く見られず、要太郎活躍の場が極めて少なく、仇討ち話としての発端と結末とは全く付けたりという感が深い。

4. 高木元『読本の世界』(「中本型読本の展開」(世界思想社、一九八五年七月)

敵討ちとしては安易な物であるが、むしろそこに至る過程の展開に様々の趣向を採用しており、そこに読者の興味を吸引しようとした作品である。…この作品に於ては、浅草という空間に「石枕」と「牛鬼」に関する伝承を重ね合わせていく手法が採られている。筋の展開による構成の文学が江戸読本の特徴だとすれば、むしろ草双紙的な要素が強いものと言えよう。

5. 新訂増補国史大系33『吾妻鏡 後編』(吉川弘文館、一九六五年二月)

6. 近世文学資料類従 古板地誌編10『古郷帰の江戸咄』(勉

誠社、一九八〇年一月)所収の赤木文庫蔵本(貞享四年刊)に拠る。なお、初版は元禄七年刊。

7. 『日本随筆大成』第2期・19(吉川弘文館、一九七五年二月)

8. 『古浄瑠璃正本集』第十(角川書店、一九八二年二月)所収の古鞠太夫旧蔵本に拠る。解題によると、この正本は焼失したようである。

9. 例えば同じ年に出版された『巷談坡隄庵』では、本文の前に「援引書籍目録」と題して引用文献を明示しているものの、作品の中心をなす典拠とはなっていない。

10. 大高洋司「文化五、六年の馬琴読本」(「読本研究」五・上、一九九一年九月)

(なかお かずのり/本学大学院生)